コーリン・クラーク著『人口増加と土地利用』

Colin Clark, *Population Growth anb Land Use*, St. Martin's Press, New York, 1967, 387pp.+Index 19pp.

著名なコーリン・クラークによって，この興味ある題名の書が書かれたことは，多くの人の関心をひくに足るが，この書の目次構成をみると，全体で9章から成り，つぎのように分かれる（括弧内はページ数）．1．人間の再生産能力（33）2．生存と増加（25）3．人口増加の歴史（64）4．人口と食糧（35）5．出生力の測定（25）6．再生産の社会学（70）7．人口増加の経済学・政治学（26）8．産業立地と人口（60）9．都市地域の土地利用（49）．このうち第1～5章は人口自体が主題で全体の半分近くをしめ，第6～7章が人口と経済社会との関連，第8～9章は人口の地域的変化とその都市集積形態をとりあげている．

第1章「人間の再生産能力」は，用語法として，人間の自然のままの妊娠能力をあらわす"fecundibility"と，それが再生産への意志に結びついて実際の出生をあらわす"fertility"とをまず区分することからはじまり，"fecundibility"のレベルについて，既存の研究資料をたんねんに追跡して比較検討している．たとえば妊娠可能期間をとおして，"fecundibility"は0.12，これに胎児死亡，妊よう期間（9か月），出産後不妊期間（20～30か月）を考慮して，結婚期間年平均0.4人出生となる．これに妊娠可能期間（20年前後）をかけて子供数約8人といったレベルが出てくる．

第2章「生存と増加」は，もっぱら死亡率の改善を追跡し，そこから純再生産率を比較している．ただし結婚率変化の影響を重視している．

第3章「人口増加の歴史」では，世界人口の増加を各大陸各国にわたって言及しており，その詳細な検討は大へん便利な資料を提供している．人口移動と戦争損失の状況もここで述べられている．

第4章「人口と食糧」では，ＦＡＯの食糧必要基準量が過大であることを批判するとともに，人口増加こそが食糧生産拡大の重要な刺激になっていることを強調している．中世に頻発した飢餓も農村の人口減少に，より大きい原因があるとしている．

第5章「出生力の測定」では，クチンスキーから最近のマーチンに至るまでの十指にあまる各種の測定方法を系統的に紹介して，きわめて有用であり．とくに純再生産率の欠陥を強調している．

第6章「再生産の社会学」は，この書で最大の70頁にわたって，再生産力と所得，教育，職業，都市・農村居住，宗教などとの関連を多数の研究をとおして，詳細に追跡しており，とくに高所得と教育とによって高い出生力をもつ状態を正常とし，1780～1940年の出生力低下を一時的移行期とみていることが注目される．

第7章「人口増加の経済学・政治学」では，高い人口密度と大きい人口増加とが，経済発展に対して，いかに有効であるかを理論と実際とについて紹介している．

第8章「産業立地と人口」は，前章をうけて，人口および産業の地域的集積および配置について，それが歴史的に進行した過程を説明し，さらに人口の地域的配置形態に関するクリスタラーやレッシュなどの諸説を，各国の多数の具体例とともに紹介している．

最後の第9章「都市地域の土地利用」は，都市における人口集積形態，土地利用密度，自動車密度，地価などの問題を中心に，多くの論文をとおして，世界各都市の実情を紹介している．

以上，この書を全体としてみると，人口の再生産，増加，地域分布に関する既存の尨大な統計資料を整頓紹介しており，それだけでも問題の再認識にきわめて有用であるが，さらに著者自身は，こうした現象をとりあげる問題意識として，人口増加と高密度とを経済社会発展のためのノーマルな基本的契機とみており，そこから人口集積がさらに集積を呼び，最後に大都市地域問題が登場するとみている．各章の配列はその線にそっている．

分析の手法としては，あくまで統計学的あるいは生態学的方法であり，そのため人口増加が経済社会発展に現実に結びつきうる具体的なメカニズムを知ることはできないが，そうした深い分析の出発点として，きわめて多くの示唆を与えてくれる内容である．（濱　英彦）